

俳句 大津俳句会

熔岩原を華やかにして草紅葉
らばはら はな くさもみぢ

井芹眞一郎

冬空や鴉一と声鳴きしのみ
からすひとこゑ

秋山 恵子

漣に写す紅葉と青空と
さざなみ

市原 初女

果てもなき馬柵のみ阿蘇の大枯野
ませ

江藤 みち

流れ星数える内に夜の明けし

大塚喜久子

日和得て一気に牧草刈られたる

坂本 セキ

麦の芽の出てきし畑縞模様

佐賀 久子

冬耕の天上青き一日かな
ひとひ

堀川 妙子

番傘と登ってきたる冬紅葉

松尾 昭雅

立ち話すぐに終はらせたる寒さ

武藤 規子

青空に一枝の無駄もなき枯木

渡邊佳代子

俳句 つのはな句会

すつぱりと桜木はだかに官軍はどこだ

星永 文夫

鷹がまう高森奥の植樹祭

梅木トキエ

君いづこ山茶花しぐれて過疎の村

塚本 洋子

北というただ一文字の寒さかな

酒井 豊美

電飾や街に平和のはじける冬

志賀 孝子

芒野に優柔不断おいできた

田上 公代

凍星や魚影の群れる難破船
いてばし

木庭 杏子

かんしゃく玉抱いてざらつく十二月

矢嶋 道子

銀杏散る地軸の傾きそのままに

上杉 波

母の住むふるさと尋ぬ百舌一羽

水野 春子

短歌 大津短歌会

為すべきは為せとぞ赤きまんじゆしやげ
 彼岸の来れば迷わずに咲く

渡辺佐代子

前照灯尾灯翼灯点しつっ

飛機は消えゆく息子の住む地へと

岩下 文代

真砂なす崎津の浜に見つけたる

桜貝とや小さく光る

吉永 恵子

震災で更地となりし君の墓

居直りて今日納骨を終ゆ

管野 静

孫と来て久木野で仰ぐ阿蘇五岳

吾を忘れて暫し佇む

豊岡ミツル

身に沁みる雨をいとわず路行けば

富有柿残し雨は上がれり

小平 善行

短歌 万年青短歌会

乱れ髪そつとなほしてくれし女
 デーサービスのお昼ねのあと

中山 春代

紅葉の季とはなりて風冷たし
とき

舞い落つ木の葉蝶にも似たり

立野 誠子

デー友の仕上げし猪愛らしく

魅せられ作る木目込の干支

合志 妙子

見遥かす阿蘇野の風にコスモスの
 花群ゆれて万のさざめき

合志 桃花

大地震にくずれし山ひだ目に遠く
 谷間のもみじ色ふかみゆく

山内 信子

運転の高令テスト受けし夫
 夕餉に笑顔で話がはづむ

磯崎テル子

冬枯れの庭に実りしむらさきを
 尉鶺鴒はついでみいくたびか去る

大林 律